
僕が僕であるために

ラミー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が僕であるために

【Nコード】

N8266B

【作者名】

ラミー

【あらすじ】

ジェノサイド・ワンと呼ばれる隕石がワシントンに落ちた。そしてそれに呼応するように現れたカリスマ能力者たち。この物語は、そのカリスマ能力者達を養成する学園のシリアスSF学園恋愛ストーリーである。

プロローグ(前書き)

更新は週一をめぐに頑張りますので、悪いところや、ここがよかったです、というところがありましたら、ご指摘待っています。

プロローグ

十二月二十五日クリスマス。突如宇宙より隕石が飛来した。

その隕石を撃ち落とそうと、人類は持てる力の限りを尽くした。だが核ミサイルでさえも、その隕石には少しばかりの傷をつけることしか叶わず、隕石はアメリカの首都ワシントンに落ちた。

ワシントンは壊滅。一握りの生き残りが残るのみとなった。

この事件はワシントン・ジエノサイドと呼ばれることとなる。

各国の研究機関は、この隕石をジエノサイド・ワンと呼称。その研究を開始する。

その結果、ジエノサイド・ワンから特殊な電波が発信されていることがわかった。その電波は世界中に発信されており、人体に有害か無害かさえも、人類にはわからなかった。

各国の研究機関は、ジエノサイド・ワンの周囲に、その電波を遮断する壁を作りジエノサイド・ワンを封印。以後、ジエノサイド・ワンのあるワシントンは封鎖され、ジエノサイド・ワンの研究も中断せざるをえなくなった。ワシントン・ジエノサイドの直後、事件との関連性は不明だが、世界中に特殊な能力を持つ人間が現れるようになる。

その能力は神の贈り物　カリスマと呼称される。

カリスマ能力者達は、一時は異常者として迫害されるも、その能力の有用性の証明、なによりその数が増加し続けていることから、いまやカリスマ能力者達は世界になくはない存在となっていた。

そしてカリスマ能力者達を育成するために、各国はカリスマ能力者養成学園を設立する。

この物語はワシントン・ジエノサイドの十五年後から始まる。

第一話『明星学園へ』（前書き）

週一更新と言っておきながら、半月以上更新出来ませんでした。ですが、内容には力をいれていますので、是非とも一読下さい。第一話ということで、説明が多くなっていますが、ご了承ください。

第一話『明星学園へ』

ワシントン・ジエノサイドから十五年。

カリスマ能力者の人数は、世界人口の二割程まで増加していた。

それだけの数になると、カリスマ能力者を正しく扱う方法を教える必要がある。そして、カリスマ能力者養成学園は、各国に一つないし、二つ程が存在する。

そしてそこに入る条件は、普通の高校と同じく試験を受けて合格することである。つまり、カリスマ能力者以外でも入学出来るのだ。それはなぜか？

カリスマ能力というのは、生まれつき、つまり先天的に持ち合わせている人間がいない。つまり後天的に身につく能力なのだ。

そして能力者と一緒にいることにより、能力者でない普通の人間も能力に目覚めることがある。もし能力が身につかなくても、カリスマ能力が重きをしめるこの時代において、カリスマ能力者養成学園卒業という経歴はプラスになることはあっても、マイナスになることはない。故に、能力者である者もない者も、数多くの者達が養成学園の試験を受けるのだ。

受験年齢は定められていないので、まだ十にも満たない子供が入学するというケースもあったりする。

そして日本にある能力者養成学園は二つ。

その一つがここ【明星学園】だ。

今年度の入学式は先月終わったが、新入生達は、やはり、まだどこか初々しい。そして、明星学園に向かう専用バスの中に、そんな初々しい新入生がいた。

「もう三週間経ちますのね。お二人はもう学園に慣れました？」

おっとりした雰囲気と美しい金色の髪を持つ少女　マニエティカ、

通称マニイは、自分の隣に座る少女と前に立つ少年にたずねる。

「私はあんまり。中学の時とは違って、普通の学校じゃないからちよつと戸惑ってる」

金髪の少女の隣に座る、ボーイッシュな感じの赤髪の少女　サクヤが答える。

「やっぱりカリスマ能力者養成学園って言うだけあって、能力関係の授業が多いでしょ？私、あんまり頭良くないから、もうちんぷんかんぷん」

サクヤが口をアヒルのように尖らせ言う。

それを見ていた二人の前に立つ少年は、深い溜息を吐きながら口を開く。

「サクヤはまだマシじゃないか。僕なんか能力者じゃないから、やっぱり肩身が狭いよ」

そう。この少年　ラルクは、カリスマ能力者ではない。前述したような試験を受けて明星学園に合格したのだ。

しかし、カリスマ能力者でない人間が明星学園に入るには、カリスマ能力者が受ける試験より遥かに難しい試験を受ける必要がある。しかもカリスマ能力者なら、その能力に応じた試験を受けることも出来るが、一般受験者にはそれが無い。故に、明星学園でカリスマ能力者ではない人間は、全体の1割にも満たないのだ。

「あら？ラルクさんは、そんなことを気になされているのですか？」

「そりゃ気にするよ。マニイとサクヤにはわからないかも知れない

けど、能力者の養成学園にいるのに、能力者じゃないのはかなり居心地悪いよ」

なら何故明星学園に入ったのか？

そんなことは、マニイもサクヤも口にしない。

ラルク、マニイ、サクヤの三人は幼なじみだ。小さい頃から三人で遊んで来たし、学校だってずっと一緒だった。

そんな三人も、中学の卒業が目前になって事情が変わって来た。

マニイとサクヤはカリスマ能力者だ。中学までは一緒にいることも出来たが、高校からは一緒にいることが出来ない。

カリスマ能力者は、中学を卒業すると養成学園に入ることを義務付けられる。

普通の高校には入れないのだ。

二人と離れたくなかったラルクは死ぬ気で勉強した。お世辞にも頭が良いとは言えないラルクだったが、何とかかんとか補欠合格で滑り込むことに成功。

今に至る。

「まあまあ。もししたら慣れるかもだし、そんな陰気オーラ全開にしなくてもいいじゃない。それ、ラルクの悪い癖だよ！」

「そうですね。ラルクさんは、少し悲観的になりすぎる癖がありますので、これを機に改善してみてくださいは？」

「…善処するよ」

サクヤとマニイの二人にたしなめられ、ラルクはがつくりと肩を落とした。

バスのスピードが徐々に落ちていく。窓から進行方向を見れば、バスのターミナルが見えてきた。

そして、明星学園での一日が始まる。

第一話『明星学園へ』（後書き）

どうでしたか？感想ご指摘がありましたら、どしどし言って下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8266b/>

僕が僕であるために

2010年10月28日06時49分発行